

# 《2006年4月例会報告》

【日 時】2006年4月28日(木) 19:00~21:00 (→その後「ルン」~3:00頃)

【会 場】筑波大学附属高校 3F 会議室

【テーマ】徹底比較 32年ぶりのワールドカップ・ドイツ大会

【話題提供者】鈴木崇正・江川純子他

【参加者(会員)】麻生征宏((株)学研) 牛木素吉郎(ビバ!サッカー研究会) 江川純子((財)日本サッカー協会) 木口理恵(学習院女子中高等科/筑波大学卒) 岸卓巨(DUOリーグボラレンティア) 島原裕司(みすず書房) 鈴木崇正(NECメディアプロダクツ) 田中俊也(三田市整形外科) 茅野英一(かながわクラブ) 中塚義実(筑波大学附属高校) 松木淳(フェアトレードサッカーボールASPIRC/筑波大学) 室田真人(NPO法人九曜クラブ/中央大学)

【報告書作成者】松木淳

注)参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

\*\*\*\*\*

## 徹底比較 32年ぶりのワールドカップ・ドイツ大会

鈴木崇正・江川純子他

\*\*\*\*\*

### ■はじめに

鈴木: それでは、少しお時間をいただいて、皆さんのお話のきっかけをつくらせていただこうと思います。きょうは若い方もたくさんいらっしゃるので、32年ぶりに開かれる2つのワールドカップ・ドイツ大会を通して、この間のサッカーの移り変わりとか、過去を振り返ることによって現在のサッカーを見通せるのではないかということで、このテーマを設定しました。私は、サッカーの専門家ではありません。書籍の編集やインターネットのコンテンツ制作などを通じて、仕事としてサッカーと関わっている者ですが、フルタイムでサッカーで飯を食っているわけではないですし、クラブとか協会に所属した経験はありませんし、指導者の経歴もありません。ですから、きょうの話の進め方は、体系的なものではありません。ただ、74年のワールドカップに対して、中塚先生と共に思い入れが非常に強いということがありまして、この大会からサッカーやワールドカップを学び、ジャーナリストの牛木素吉郎さんや賀川浩さんの文章を一生懸命読んで、勉強させていただいたような世代です。そういったことも含めて、2つの大会を比べて、あるいは、そこから見通してみようというのがきょうの狙いです。

私と中塚先生は同い年で今年44歳になりますが、1974年当時には中学校1年生だったんですね。サッカーがすごく面白くて、毎日暗くなるまでボールを蹴るっていうような環境で、私は東京で、中塚先生は大阪ですけども、この大会を日本全国で見ていた少年たちの一人でした。この大会は日本人にとって、ある意味エポックになった大会だったと思います。というのは、牛木さんは2度目のワールドカップの取材だったというお話でしたけれども、やはり、一般的な日本人が初めてワールドカップの決勝を生中継で見るとか、テレビ東京(当時の東京12チャンネル)が、大会が終わってから全試合を放送するという事を通じて、毎週、世界のサッカーを、ワールドカップという

大きな大会を見たという経験をしたわけです。

お配りした資料の1枚目に、今日お話ししようと思っている項目を左側、右側に2つの大会の比較ということで簡単な表を作りました。ドイツでワールドカップが開かれるのは今回で2度目なのですが、他にも2度ワールドカップを開催している国がいくつかありますが、ご存知でしょうか？ 牛木さん以外に（笑）。まず、イタリアがあります。イタリアは戦前に1回やって90年にも。それから、フランスも戦前に1回やって、記憶に新しい98年大会。さらにメキシコが70年と86年の2回。86年はコロンビア大会が急遽メキシコ大会に変わった事情がありました。したがってドイツが、2度目のワールドカップをやる4番目の国ということになります。

表にありますように、2つの大会を比べて、まず、本大会への出場国数が違うんですね。当時は16ヶ国だったのですが、いまはその倍の32になった。大会期間、これがほぼ同じ時期ですけれども、試合の日数は、74年大会が全25日間のうち12日間、実に13日間休みがあったんです。一方、今回のワールドカップは31日中、休みの日は6日しかないということで、もちろん、試合数が増えて（試合数は74年が38、2006年は64試合）、参加国数が増えたということに応じて、とても忙しい大会になった。当然現在のワールドカップですから、テレビ放映の問題、あるいは、観客の事情というようなこともあって、32年間ですいぶん忙しいワールドカップになったんだなということが、単純な数字の比較から浮かび上がってきます。

日程面では、「ワールドカップ74日程」というサッカーマガジンのコピーをご覧ください。当時はだいたい3日やると2日休みですね。かなりお休みがありました。牛木さん、このあたりの事情はいかがだったでしょうか。報道陣の移動の手間など考えると、当時は余裕がありましたか？

表. 2つのドイツ大会の比較

1974年 西ドイツ大会		2006年 ドイツ大会
1974年6月13日～7月7日	大会期間	2006年6月9日～7月9日
全25日間で、13日間	試合のない日数	全31日間で、6日間
38	試合数	64
9	試合会場数	12
1次リーグ・2次リーグ・3位決定・決勝	大会方式	1次リーグ・トーナメント・3位決定・決勝
ミュンヘン	決勝戦開催地	ベルリン
16	本大会出場協会数	32
142	FIFA加盟協会数	207
91（出場辞退4）	予選出場協会数	194（出場辞退3）
224	予選試合数	847
1000万人超	予選観客数	1865万7843人（1試合平均2万2028人）
西ドイツ	優勝国	？
オランダ	準優勝国	？
決勝戦 8億人	テレビ視聴者数	？

牛木：全くそうですね。でもこの前のメキシコ大会の方がもっとゆったりしましたね。

鈴木：ドイツの交通事情は当時からよかったですか？

牛木：僕は、あまり知らなかったのですが、国内の移動のためにも、あらかじめ飛行機の予約を取って行っていたのですが、行ってみたら新聞記者には鉄道の半額パスが出まして、それでベルリンからハ

ンブルクに移る時だけ飛行機を使って、あとはみんなキャンセルして、汽車で動きました。非常に便利で、今度行かれる方たちも、たぶん鉄道が便利だと思います。

鈴木：あとでVTRを見ますが、西ドイツ大会では2次リーグというものがありました。1次リーグで16カ国のうち各グループ上位2チームが2次リーグに進み、2次リーグに進んだ8カ国が4カ国ずつ2グループに分かれてリーグ戦をして、そのグループの中で一番成績の良いチームが決勝に進む方式です。そこが今と違うところです。

F I F Aの加盟国数が、74年当時は142。今は200を越えています。正確に言うと、現在は207なのですが、予選をやっている時にはもう少し少なかったかもしれません。予選に出た協会数は飛躍的に伸びています。当時は91（エントリーは95ですが、出場辞退が4カ国あります）。それに対して今回は、194の協会が最終的に予選に参加しました（エントリーは197）。したがって、予選の試合数も増え、世界中の予選に詰め掛ける観客数も飛躍的に伸びています。今回のワールドカップ予選の観客数は平均で2万人を超えています。こうした規模の面で、ワールドカップがこの32年間で飛躍的に大きくなったといえると思います。

## ■1974年、新しいF I F Aワールドカップ

鈴木：配布資料に従って話を進めます。ここに用意したのはキーワードでしかありませんので、意味が分からなかったり、そこは違うぞというようなことがあれば、どんどん突っ込んでください。

我々がこのワールドカップを体験したのが中学生のときでしたので、社会性とか難しいことはよく分からなかったのですが、今までの間に、これを反芻したり、いろいろな勉強をして、こういう事実があったということに気がつくようになりました。

まず、新しいF I F Aワールドカップになったということが象徴するように（70年の大会でブラジルが3度目の優勝をし、前のカップであったジュール・リメ杯を永久保持することになり、新しいカップがつけられた）、いろんな意味で新しいワールドカップであったという位置づけがされています。現代まで続くようなことが、この時に起きていると感じます。

大会は6月13日に始まっているのですが、6月11日、開幕の前々日にF I F Aの総会が開かれています。ここで選挙があり、F I F Aの新しい会長にジョアン・アベランジェというブラジルの人が選ばれました。それまで、歴代のF I F A会長は6人いましたが全てヨーロッパの人で、2人がフランス人、3人がイギリス人で、1人がベルギー人でした。初めて非ヨーロッパ地域から、アベランジェという人がF I F Aの会長になって、ブラッターに代わるまで長きにわたりF I F Aの会長の座に居座ることになるわけです。アベランジェさんはこの選挙で勝つ時に（これは報道されている数字ですけれども）、100ヶ国を行脚したという、非常に精力的な選挙運動を行い、非常に多くのお金を使って支持を求めた。非ヨーロッパ地域、特にサッカー強国以外のアジアやアフリカなどの協会が意見を強めていく時代の中のワールドカップ、あるいはF I F Aの会長選挙だったので、アベランジェはサッカーの新興勢力というか途上国の人たちに働きかけて、例えばワールドカップの出場国を将来的に増やすとか、サッカーの普及のためにユース年代の世界選手権を開催するとか、そういう施策を公約にして選挙に勝ったと言われています。このあたりの事情はいかがでしょうか？

牛木：今のご指摘は非常に面白いですね。実際にはまだ、欧州と南米の大会で、アベランジェも南米の人間で他の地域ではないわけですが、アジア、アフリカが入ってきて、そういう中でアベランジェが当選したわけですから、そういう意味で、競技だけでなく、大会の背景のターニングポイントであったと思います。

## ■イタリアの無失点記録

鈴木：ここからは具体的にどういう大会であったのかを振り返ります。ビデオを用意しましたので、それを見たいと思います。

最初に取り上げるのが、イタリアの無失点記録です。当時からイタリアは当然サッカー強国であって、前のメキシコ大会で準優勝している国なのですが、74年大会に至るほぼ2年近く、1年8ヶ月くらいの間、失点をしていない国としてワールドカップに乗り込んできました。イタリアはご存知の通り「カテナチオ」という守備偏重の戦術で有名でした。私は実際それを見ていませんので、印象を述べることはできませんが、そういう言われ方がされていました。カテナチオというのはイタリア語で、鍵または鍵をかけるという意味らしいです。ゴールキーパーのディノ・ゾフという選手が一貫してイタリアのゴールを守っていて、後に監督を務めていますけれども、「ゴールに鍵をかけた男」という異名を授けられていました。そうした話題が大会前に盛んに報道されていたので、「イタリアのゴールを割るのはいったいどこの国の誰か」ということが大きく取り上げられていました。この大会前のイタリアの最後の失点が、1972年9月、3対1でユーゴに勝った試合で、ユーゴに1点取られたのはPKだったそうです。このとき以来、74年の6月の開幕まで失点がないんです。これを時間にするると1142分。1143分目に失点するシーンをこれからご覧いただくんですが、これを90分で割ると12.68試合。どうですか？ 1年8ヶ月で12.68試合というのは、代表チームの試合数としたら、今と比べたらちょっと少ないと感じられる方がいらっしゃるかもしれません。インターナショナルマッチデーは今、年に何日ですか？

江川：年によるんですけども、8~10日でしょうか。

鈴木：ちなみにイタリアの最近2年間の試合数を調べてみたところ、この2年間で代表チームは22試合やっています。2年間というのは、2004年ユーロに負けたあとのフレンドリーマッチから数えた数字です。

さて、イタリアの初戦はミュンヘンで、ハイチとの試合でした。ハイチはワールドカップ初出場、中米地域の国ですが、国際的には全く無名で、この大会でも注目度の低い国でした。前半は0対0でしたが、前半はイタリアが攻めまくったという記事があります。0対0で折り返して、後半、キックオフからご覧ください。1分くらいでハイチがあっさり先制します。

[VTR]

鈴木：昔の試合を放送してこれだけ興奮できるアナウンサーも素晴らしいですね(笑)。イタリアは前評判が非常によく、無失点を続けている守備の安定がすごく評価されていました。グループリーグの初戦、この「1143分目の」失点をした後、3点を取り返して、試合は3対1で勝つんですけども、次のアルゼンチンと引き分け、最後にポーランドに敗れ、1次リーグで敗退して、散々な結果に終わる大会になりました。牛木さん、イタリアに対する評価はいかがでしょう？

牛木：すっかり忘れていました(笑)。イタリアはいつの大会でも評価は高いけど、いつの大会も…(笑)。

鈴木：ドイツにはイタリア人の出稼ぎ労働者がたくさんいたということですが…。

牛木：イタリアの国境に近い町(シュツットガルト)でイタリア対ポーランドの試合があったとき、ものすごくたくさんイタリア人が来ていましたね。

中塚：僕が中1の時に読んだ、中条一雄さんの『おおサッカー天国』という本をこの機会に改めて読んでみたところ、当時の下馬評について書かれていました。それによると、決勝戦は西ドイツとイタリアだろう。決勝の会場はミュンヘンなのでイタリアに近い。そうするとイタリアの熱狂的なサポーターが押し寄せてすごいことになるぞ、というような記事です。1点取ったハイチは、この大会では3弱と呼ばれた国のひとつで、あとはアフリカ代表のザイールと、アジア・オセアニアの代表であるオーストラリアです。現に、ハイチはこの後、ポーランドに7点取られ、ザイールはユーゴスラビアに9点取られています。オーストラリアはその中ではよく頑張ったという論評もありました。

## ■東西ドイツ対決

鈴木：ご承知のように、東西ドイツがひとつの国になってからまだ15年ほどしか経ってないんですけど、74年当時は西と東に分かれていました。第2次世界大戦後に両国がそれぞれ独立国にされてしまうんです。48年に西ドイツができて、49年に東ドイツができるんですね。61年、つまり中塚先生や私が生まれた年にベルリンの壁ができて、東西の緊張が非常に高まった時期もありました。しかし2つのドイツが成立しているという既成事実が何年も続くと、だんだん緊張緩和の流れというのも一方では出てくるんですね。73年に両国はそろって国連に加盟します。お互いの体制を容認するようなことはないんですけど、両国が国連に加盟するまでに、国際的に認められてきた状況であったといえるのではないのでしょうか。

決勝大会の抽選は、今では前の年の12月に行われていますが、74年大会の抽選は1月5日に、フランクフルトで行われてました。これは、その様子を報じる雑誌のコピーです。41ヶ国に実況中継されたのですが、この少年、ランゲ君という11歳の少年ですが、彼が、両ドイツが同じグループリーグに入るくじを引いてしまって、会場内で大きなどよめきが起こったと報じられています。両ドイツの初対決、しかも地元開催のワールドカップでの初対決だったので、センセーショナルな話題になったということです。1次リーグ最終戦だったのですが、最終日の試合が今のように同時刻に行われるということがなく、同グループのチリとオーストラリアの試合が同日の昼間に先に終わっていて、その結果、東西ドイツともに2次リーグに進むことが決定している状況での試合でした。

## ■西ドイツの悩み 「ネッツァーか、オベラートか」

鈴木：当時、西ドイツのゲームメーカー（主に中盤にいてゲームを組み立てる選手の意味）は、ネッツァーとオベラートのどちらだ、ということが国民的な議論だったと言われてます。ネッツァーはロングパスの名手で、ドリブルとパス、フリーキックに特徴のある、金髪で長髪のプレーヤーで、非常に人気がありました。2年前の72年のヨーロッパ選手権で、ベッケンバウアーとともに中心になって、ドイツを優勝に導いた選手です。一方のオベラートは左利きの中盤のプレーヤーで、66年、70年のワールドカップに連続して出ている中心選手でした。ネッツァーは74年大会の時点で、西ドイツのボルシア・メンヘングラッドバッハからスペインのレアル・マドリッドに移籍していました。オベラートはずっとケルンで選手生活を送っています。この対照的な2人の起用が国民的関心事になり、どちらを起用したらドイツは優勝できるかというようなことが盛んに言われていたんですね。これは現代サッカーと違う状況だと思います。1人の選手（あまりに素晴らしい選手だからかもしれませんが）のどちらを起用するかということが非常に分かりやすい形で関心事になるということが、今ではあまりないのかなと思います。当時と現在の戦術やその考え方の違いが関係しているんでしょうが、当時は中心となる選手をめぐる議論になっていたんですね。例えば、フィリップ・トルシエがワールドカップメンバーに中村俊輔を選ばなかったとか、そういうレベルの問題ではないと思います。これについてはいかがでしょうか？

牛木：まあ、当たっているには当たっているでしょう…

鈴木：これから見ていただくのは、東西ドイツの試合です。

[VTR]

鈴木：時間帯によって違いますが、基本的には、西ドイツがボールをキープして攻める時間帯が多いですね。東ドイツは長いパスによる速攻で相手ゴールに迫るといって、西ドイツのファンにしてみれば優勢なのに点が入らないということでイラついてきたという試合でしょう。西ドイツのTV

は面白くて、交代出場のネッツァーと途中で引っ込んだオベラートの顔を交互に映したりして、この2人にフォーカスしていますね。

試合は、攻めきれない西ドイツが後半の中頃にオベラートに代えてネッツァーを入れるのですが、結局、東ドイツが1対0で勝って、西ドイツにとっては大会の節目の試合になりました。ネッツァーを出して結果的に負けてしまった。負けた理由はもちろんあったでしょうけれども、さっき日程上の話を申し上げたとおり、両国とも次のラウンドへ進めることが決まっていたので、むしろ、西ドイツの方は優勝を狙うために、2次リーグでオランダとブラジルのいるグループに入りたくないのでわざと負けるか引き分けを狙ったのではないかというような報道されたことがありました。これについてはどう言われていたのでしょうか？

牛木：僕は引き分け狙いだったと思いますね。僕はこの試合を見ていたんですよ。ちょっと話が横にずれますけど、ネッツァーが交代で出てきた時に、僕の隣に座っていた記者が突然立ち上がって、「カイザー・イズ・カミング！」と叫んだのです。つまり、ネッツァーの人気っていうのは、「王様が来たぞ」「オベラートではなくカイザーだ」と新聞記者が興奮して言うぐらいのものだった。だけど実際には、ネッツァーかオベラートかっていう話は、1、2戦でオベラートが使われているわけですから、もう解決しているんですよ。

僕は、東西ドイツの対決を見に行っただけけれども、東西ドイツの対決は、それほどシビアではなかったように思いましたね。会場の雰囲気はそうではないですね。これは、後になって思ったんですけど、東西ドイツの対立は政治的な問題ですね。だけど、ドイツの大衆は2つの国民の対立であるとは意識してないんです。同じ国だと思っている。後のベルリンの壁以降の感情で我々は見えて、きびしい対立だと思っていますが、それは米ソの対立であって東西ドイツの対立ではないんです。非常にシビアな感じではなかったと、僕はいままでは思っています。

中塚：牛木さんに質問なんですけれど、74年は「西ドイツ」開催ですが、東側のベルリンでも試合をやっています。西ドイツの飛び地である「西ベルリン」で開催されているのですが、僕にはどうも、昔から西ベルリンというのがイメージできないんです。例えば、ハンブルグからベルリンに行くには、途中、東ドイツの領内を通過していくわけですよ（列車で行く場合は）。そこで、途中で脱け出すような人が出ることはないのでしょうか？

牛木：それはできません。かなり列車の中も厳重に規制されています。列車内は西側で、列車は国境と同じですよ。列車内では係官がパスポートを見にきました。かりに東側の地域に降りるのであれば、出入国手続きがあるわけですから。

中塚：ワールドカップは大量のわけの分からない人たちがやってくる大会で、よくベルリンが会場になったなあと思うのですが…

牛木：いや、当時のベルリンはですね、1つの都市が2つの東西ベルリンに分割されていて、西ベルリンの方は飛び地ですけども西ドイツの領地です。移動する時だけ問題があって、移動してしまえば西側ですね。移動する時は、列車とか、飛行機の中に隔離されていて、そんなに大量の人間が移動することはできない。着いたところは西ベルリンで西側ですよ。ただ、我々が今思っているイメージはベルリンの壁以降のイメージだけれども、それほど厳しくはないということはあるんですよ。

中塚：例えば、東ベルリン在住の人が、西ベルリン会場の試合を見に行くっていうことはやっぱりだめだったのですか？

牛木：いや、だめだったっていうことはないですよ。制限されてはいましたが、まったくダメだったわけではない。選ばれた人たちが、切符を買って、パスポートを持って見に行くことは許されていました。このころは、親戚に会いに行ったりとかよくあったようですね。西ドイツの監督だったヘルムート・シェーンは、もともと東ドイツに住んでいて、若いころに西側に行って、また戻ったりしている。それで結局、西側で雇われることになったから西側に行った。当時は、わりとそういうことができた。ただ、大量にくることは難しかった。

鈴木：ネッツァーかオベラートかっていうことでいうと、すでに、前の2試合のオベラート起用で解

決済みの問題だったってことはですね、この試合でネットワーを途中で出して負けたということは、意図したものではないでしょうけれども、代表監督のシェーンにとってはネットワーをはずしたことの言い訳ができたようなものですね。結果的に好都合だったということが言えますね。

牛木：まあ、ファンの要望に応じてネットワーを出したわけで、もうお花見試合になっているわけですから、結果はそれほど重要ではないわけです。もちろんネットワーのできが良ければ、それはそれで良かったんでしょうけれども。

実はね、シェーンの回顧録というのがあって、明石真和さんという駿河台大学のドイツ語の先生が訳して、それを出版できないかと僕のところへ7,8年前に持ち込まれたことがあります。版權取ったりしたらとても成り立たない。だから出版できなかったけれど、今度、その内容も含めて、明石先生自身が自分の取材したものを中心に『栄光のドイツサッカー』という本が大修館書店から出ます。その中にいま言ったような話も出てきますから（笑）。

## ■セットプレーからの得点

鈴木：セットプレーからの得点というのは、我々子供心に印象深いものが非常にたくさんありました。配布資料の後ろの方にあるのは、牛木さんが当時書かれた『サッカー世界のプレー』からの引用です。リスタートから点を取るということをどう捉えたらいいのかという戦術がまとめられています。それを映像としても見ていきたいと思います。1つ目は、この大会の得点王になったポーランドのグジェゴシユ・ラトーです。彼は、ニアポストに入り込んで印象的なゴールを決めました。ここに典型的なニアポストからのシュートがあります。これはセットプレーから、左からのコーナーキックからの得点です。

[VTR]

鈴木：高い長身のディフェンダーがいるところに放り込むのではなく、その前で勝負するという、スピードを要求されるようなプレーが得点を生み出す。しかもセットプレーで、止まったボールからというようなことがポーランドの目論みとして成功した。もう1つ、これはセットプレーでもニアポストでもないんですが、ポーランドの典型的な得点です。これも得点王になったラトーの得点です。これは3位決定戦、ブラジルに1対0で勝ったゲームです。ポーランドがアマチュアながら前回王者を倒し、3位になるセンセーションを巻き起こした試合でした。

[VTR]

鈴木：セットプレーといえば、この大会はブラジルのリベリーノの得点がすごく有名です。ブラジルは、こういうセットプレーのパターンを20とか30用意して大会に乗り込んできた。つまり、このクラスの人たちは、セットプレーで得点を生むということを戦術の1つとしてかなり明確に意識していたということが言われていました。リベリーノだけでなく、何人も蹴り手がいたということです。この東ドイツ戦のリベリーノのフリーキックは、味方選手を壁の中に立たせ、ボールが放たれた瞬間に壁の中の選手がかがみ、壁にあいたほんの30~40センチの隙間を通してゴールするという、まさに神業のフリーキックです。中学生時分、サッカー部の友人を壁にしてよく真似たものですが、私が蹴ると必ず壁の中の友人がうずくまって倒れたものです（笑）。

[VTR]

## ■オランダ（ヨハン・クライフ）

鈴木：オランダのトータル・フットボールやヨハン・クライフなど皆さんご存知だと思います。優勝した西ドイツよりもオランダに大きな関心が集まったといわれています。これは、1次リーグ、スウェーデン対オランダの試合です。結局、0対0に終わりましたが、一番面白い0対0の試合といわれています。

[VTR]

鈴木：何回かオフサイドトラップのシーンが出てきます。オフサイドトラップという戦術は昔からあったといわれていますが、これほど大胆に、気持ちよくやっちゃうのはまさに革新的だったのではないかと思います。

中塚：当時テレビで見たときは、気がつけばオフサイドになっていたというだけで、実際に何が起きているのかよく分かっていなかったと思います。だけど、今から考えると、テレビの画面外で全部やっているわけですね。いま、実は高校生の指導で、74年の映像を時々使うんです。前線からのプレッシャーとバックラインの押し上げというテーマで。うちの高校生ぐらいたと、この映像と戦術に興味を持って、乗ってくるんですよ（笑）。

鈴木：クライフターンっていうのは皆さんご存知ですね？ それが出るのがこの試合ですね。

中塚：ターンをした後で、右のアウトでクロスを上げるんです。アウトサイドでボールを蹴ってこんなにボールが上がるのかということが、当時の中学生には不思議でたまらなくて。だけど、芝生の上だとできるんですよ。

[VTR]

鈴木：これは2次リーグのアルゼンチン対オランダの試合です。4対0でオランダが勝つ試合です。

ここでも、非常に激しいプレッシングと極端なオフサイドトラップを見ることができます。アーリー・ハーンという、アヤックスの中盤のプレーヤーがこの大会で最後尾を務めているんですけど、彼が大声を出して、ラインをわーっと上げるシーンがあります。オランダは全員がハーフラインを越えちゃいます。統制のとれた、高度にトレーニングされた戦術だということですね。

中塚：今でこそこんなところからプレッシャーをかけるのが普通になっているけど、当時はこんなことをやっているのはオランダだけでしたからね。

[VTR]

鈴木：これは、オランダの2次リーグの東ドイツ戦です。この試合も2対0でオランダが勝ちます。

これは、牛木さんが紹介されているエピソードでもあるんですが、クライフが試合中にピッチの外で雨用のシューズに交換するんですよ。その時に、バイゼという東ドイツの選手が、クライフの横に立っていたというんですね。そのぐらい、クライフにずっとくっついていて、牛木さんが紹介されているエピソードによると、翌日のドイツの新聞では、クライフがトイレに行っても、バイゼはドアの前で待ったに違いないと（笑）。

[VTR]

鈴木：オランダは順当に勝ち進み、2次リーグ最後のブラジル対オランダ戦で勝った方が決勝に進めるといって、実質上の準決勝になりました。ここでまず1点目を見てもらいます。オランダ陣内でブラジルの反則があります。オランダの自陣内で、すぐスタートします。お配りしている資料の後ろ

から3枚目が今のシーンの解説です。牛木さんの書かれた『サッカー世界のプレー』の中からコピーしたんですが、自陣のフリーキックからニースケンスがボールを1回受けて、短くドリブルをして、右のクライフに。それで、クライフがドリブルしてニースケンスに入れて、ニースケンスがスライディングしながら決めたというシーンです。資料が前後して申し訳ないんですが、その2枚前に、「停止球からのプレー」という項目にまとめられています。

オランダは攻撃パターンの練習を繰り返しやった。1日1つのパターンの練習を5時間繰り返したというようなことがここで指摘されています。そういうトレーニングから生まれた得点だったということです。ブラジルにとっては敵陣で犯した反則でリスタートされているんですけども、それに対処できないうちに点を取られてしまうというやり方を、オランダは狙っていたというようなことですね。もう1つのシーンは、この試合の2点目で、有名なシーンです。クライフのシュートです。これは、すばやいリスタートというよりも、やはり自陣のリスタートからの展開です。

[VTR]

鈴木：オランダは圧倒的な強さで決勝へ勝ち進んで、決勝戦のキックオフ直後に先制します。西ドイツが1回もボールに触れないうちに点を取るんですが、ここでもクライフの動きがポイントです。ワールドカップの決勝でこんなセンセーショナルな始まり方っていうのはたぶんなかったと思います。

[VTR]

鈴木：前半の25分にドイツが追いつきます。そして43分に逆転ゴールが生まれます。オランダが素晴らしいとばかり言われていますが、優勝した西ドイツも、才能ある選手による実力のあるチームでした。お配りした資料の最後に牛木さんが記された決勝点の解説があります。オランダが攻め上がって、右サイドのシュルビアというサイドバックが中に切り込みながらクロスを上げます。それを西ドイツのボンホフという選手がヘディングでGKにバックパスをして難を逃れます。その後、GKマイヤーから右にボールを展開します。クリアしたボンホフが非常に長い距離を走って、右サイドでボールが回っているうちに、相手陣内の右サイドに飛び出して、うまいタイミングでドリブルを仕掛け、オランダのスーパーを抜くという決定的な動きをします。後は、ゴール前でミューラーという特異な才能を持ったストライカーが決めて決勝点を取ったというシーンです。

[VTR]

鈴木：ヨハン・クライフのユニフォームが2本線なのは、クライフがプーマ社と個人契約を結んでいたもので、アディダス支給のチームのユニフォームは着られないということで、線を1本取ったという、今では考えられないようなことをやっています。クライフがすごいということと、そういう契約がちゃんと整備されていなかった時代のことなのではないかと想像します。

アディダスはこの大会で非常にたくさんのチームにユニフォームを提供して、世界中の人たちが3本線を目の当たりにしました。これは、すごい効果があったと思うんですね。僕らは中学生でしたが、学校の体操服の代わりにアディダスを着て体育の授業に出て、先生に怒られたことがありました。そういう時代ですね。そのぐらいかっこいいものでしたし、また、すごく高価なものでした。この映像からわかるとおり、テレビの影響で、みんながすごくかっこいいと思うようなものになっていったんですね、この当時から。

## ■トータル・フットボール

鈴木：オランダのトータル・フットボールは語り尽くされているかもしれませんが、牛木さんは、2次リーグはオランダの試合を全てご覧になったということですね。実際いかがでしたか？

牛木：自分が見て、自分が書いてきたことなのに、とっくの昔で忘れていたことなんです…。トータル・フットボールは語り尽くされたということですが、僕にはまだ分からないことがあるんです。「トータル・フットボール」ということばの意味は何であるかということなんです。

今、だいたいお話があったように、戦術面では、早く守備ラインが高く上がっちゃうんですね。前に出ちゃって、そして、ボールを持っている1人の相手に対して2人、3人とプレスをかけていくということが特徴だったわけです。1つには守備ラインを上げること、それから、ボールを持っている1人の相手選手に対して、2人、3人で取り囲んで奪いに行く。これを「ボールハンティング」と書いてあったんですが、なんて訳していいか考えました。いろんな訳し方があって、僕は「集中守備」と訳したんですね。毎日新聞の荒井義行さんは「囲い込み」っていったかな？

鈴木：はい、「ボール狩り」とそのまま訳して…

牛木：ハンティングの直訳だね。まあ、いろいろに訳されたわけですね。どうしてオランダがそれをやったかという、リヌス・ミケルスっていう監督が決めたんですね。大会後に、リヌス・ミケルスの手記を、僕が翻訳してサッカーマガジンに連載したことがあります。実はオランダの雑誌の記者がミケルスにインタビューして、まとめて英語で送ってくるのを訳したものです。どの程度、ミケルス自身の言葉として信用できるかは分からないんですけど…。それに書いてありますが、守備ラインを上げると、その後のゴール前に広いスペースがあいてしまう。そこへ相手が走り込んだとき、もし審判がオフサイドをとってくれなかったらどうするか。ボールが前に出て、後ろのラインから走り出てきた方が早かったらどうするかという問題がある。その対策として、それまでナショナルチームのゴールキーパーだった選手をはずして、守備範囲の広いゴールキーパーを起用したという話を書いてある。これがオランダの戦法の基礎なんですね。

僕が疑問に思っていることが2つあって、1つは、これはアヤックスがもともとやっていた戦法なんだよという説もあるんだけど、本当だろうか、ということです。それからもう1つの問題は、その戦法をなぜ「トータル・フットボール」と呼ぶんだらうか、ということです。この2つの疑問について皆さんが知っていることがあったら聞きたい。

中塚：そもそも、誰が言い出したんでしょうか？ トータル・フットボールっていうのは？

牛木：そうですね。それも問題ですね。もう僕らが知ったころには、すでにドイツの新聞に書いてあるわけですよ。

田中：ワールドカップが終わった直後ぐらいから、オランダはトータル・フットボールだったっていうことをもう書いてあったんですか？

牛木：いや、大会の最中から。

田中：大会前は、そんな下馬評というか…。

牛木：それは知りません。ただ、それは、僕らが知らないだけであって、ミケルスがトータル・フットボールをやろうとしているよ、ということをオランダの新聞やドイツの新聞で書いてあったかもしれない。僕らは行くまでは何も読んでいませんから知らないんです。それで、なぜかということなんです。

中塚：今、ワールドカップごとにF I F Aのテクニカルグループが技術レポートを作りますよね。当時はあったんですか？

牛木：それはありました。

中塚：そこでもトータル・フットボールという表現が用いられているんですか？

牛木：それはちょっと記憶にないけれど、でも、F I F Aのレポートが出るのはずっと後ですから。僕らはその日その日の試合で書いているわけですから、F I F Aのレポートみたいのは見ませんよ。それは、半年から1年後に見るわけですから。

鈴木：ポジションチェンジという概念で見ると、例えば、ディフェンスの選手がオーバーラップをす

る。つまり、前の選手を追い越してボールにアプローチするというような縦の関係でのポジションチェンジは以前からずっと概念としてあった。クライフという天才をもって、縦だけではない、非常に流動的な、渦巻きのような動きが出てきた。つまり、ローテーション・フットボールだというイメージを持って、その動きを表現した言葉ではないですか？ グランド全体がトータルに1つの法則にのっとって、選手とボールが動くというイメージをトータルといったんだと、私はイメージしていたんですけど…。

牛木：僕もそのように本に書いたのですが、実は、ワールドカップの2年前に、ドイツがイングランドに遠征して、そしてその記事がイングランドの新聞に出て、そこに、ドイツのサッカーはトータル・フットボールだと書かれていたということです。ドイツのサッカーに詳しい駿河台大学の明石真和さんが、その記事を見つけたんです。それで、明石さんが僕に質問したんです。トータル・フットボールはオランダがはじめたっていうふうに言われているけど、その前にドイツが始めたんじゃないですかって言うわけです。ドイツが2年前にイングランドに行ったとき、トータル・フットボールという言葉が使われている。それは、全員攻撃、全員守備、分業制ではないという意味なんです。2年前にすでに使われていた言葉をオランダに当てはめたのではないか。そういう疑問です。

この場合は「全員攻撃、全員守備」という意味で、オランダがやった守備ラインを上げるとか、コンパクトに囲い込みをするとかということとは、直接の関係はない。サッカーの戦法の歴史みたいなことを考えると、この大会の非常に大きなポイントは、オランダが守備ラインを上げて囲い込みをする守りをやったということだろうと思う。それが、その後の世界のサッカーの戦法に非常に大きな影響を残したと思います。だから、これは、この大会の非常に重要なポイントだったと思うんですけど、それは、トータル・フットボールという言葉とあまり合わない。トータル・フットボールという言葉とその内容とはちょっと離れているのではないか。これが僕の今の疑問なんです。だから、今度、明石さんに、さらに調べてもらおうと思っています。

中塚：古い本を持ってきたんですけど。チェコの方が書かれた『世界サッカー史』という分厚い本で、牛木さんも監修に入っておられる。ここに「ユニバーサル・サッカー」という言葉が使われています。74年の大会で新しいものはあったかという話で、ミケルスが「ユニバーサル・サッカー」という言葉を使って表現しているというくだりがあります。少なくともここでは、トータル・サッカーではなく、ユニバーサル・サッカーという言葉を使用しています。「トータル・サッカーという言葉は地元の新報でしきりに使われた。これはいったいどういう意味であろうか。ユニバーサル・サッカーを滅ぼそうとしているのか」とも書いてあります。このほかにも、いろいろ書かれていますが、牛木さんが言われたような疑問をもたれた方もいらっしゃるのかなあとと思います。

牛木：このチェコ本はですね。ベースボールマガジン社におられた大竹國弘さんという人が翻訳して、僕たちが書き直したんです。だから、日本語としては僕たちに責任があるものなんですけど…。ユニバーサル・フットボールという名前はともかく、トータル・フットボールという言葉は、内容と合っていない。しかし内容は、戦法の歴史から見ると画期的であった。全員攻撃、全員守備、というようなことは、それ以前から、ドイツの教科書に書いてあるんですよ。でも、それがイギリスにとっては珍しかったのかもしれない。

もう1つ。これは、今度出る明石さんの本に書いてあるんですけど、ドイツがオランダと決勝戦で当たることになった時に、その前の練習で紅白試合をやった。レギュラー組とリザーブ組に分けて、リザーブ組をオランダに見立てて、オランダがやっているようなことをやらせてどう対応するかという練習をした。その時に、クライフ役が必要だった。で、クライフ役を誰がやったかという、それはネットァーがやった。当時の国民的英雄のネットァーがレギュラーになれなくて干されている中で、クライフの役を喜んでやったということが書いてある。それは、僕は非常に感動的な話ではないかと思うんですよ。それはシェーンの話の中に書いてあるんですけど、明石さんはパーティーでネットァーに会ったときに、ネットァーに直接聞いたんだそうです。「本当にクライフ役をやったんですか？」「そうだよ、やったよ」。こう言ったわけです。それを明石さんから聞いて、本

に書き加えてもらいました。これもなかなか面白い話です。

もう1つお話しすると、この『サッカー世界のプレー』の本を書く時に、たくさん得点場面などの図版を入れました。ほとんどビデオからおこしたのですが、この大会は日本へは決勝戦以外は生中継がありませんでしたから、それ以外のビデオをどうやって手に入れたかということですね。これはドイツのソニーに頼んで、現地で全試合ビデオにとってもらったのです。当時、「弁当箱」って言っていた大きな業務用のテープです。それを僕が全部持って帰ったんです。

持って帰ったんだけど、日本で再生して見るには2つ問題があった。1つは、業務用のテープですから、家のデッキにはかからないんです。もう1つは、ビデオのシステムが欧州と日本では違うことです。大崎に欧州向けの機械を製造している工場があって、そこの研究所に頼んで、再生してもらって、大崎でそれを見ながら作図したんです。絵描きさんはサッカーを知らない人で、非常に苦労しました。

余談ですが、そのときにソニーの技術者の方が「やっぱりオレンジがにじむなあ」とつぶやいたんです。オランダのオレンジ色がぶれちゃうんです。当時のビデオテープの技術的欠陥だったんですね。それをどうしたら解決するかを彼らは考えていたんです。いまは解決したかどうかは知りませんが（笑）。

## ■2006 ドイツ大会 大会運営に関わるレギュレーション

鈴木：サッカー協会で、日本代表の実務を裏方でいろいろやっていらっしゃる江川さんに少し話していただきます。日本代表がドイツ大会に出るということで、大会の運営に関わるワークショップの担当者です。

江川：3月にドイツのデュッセルドルフで「チームワークショップ」という事前説明会が行われました。監督さんも出席してくださいという通達がFIFAからありましたが、国によって監督さんのポジションとか仕事の仕方が違いますので、ジーコ監督の場合は自分が出ないということでした。で、技術委員長の田嶋幸三さんが出るようになって、あとはアドミニストレーション、マーケティングなどそれぞれの担当者が行きました。3月5日から8日まで開かれて、参加国以外のプログラムもありました。それはFIFAのジェネラルコーディネーター説明会やチームドクターのセッションなど、それにチーム向けのメディアのセッション、マーケティングのセッションです。

監督を集めて行われるセッションは、1つはテクニカル・スタディ・セッション、もう1つは大会競技要綱の解釈に関するセッションです。この2つは、監督、もしくは監督の代行者が出席してくださいということでした。テクニカル・スタディ・グループのセッション中、出場選手23人の登録締切が5月15日になっているFIFAの取り決めはおかしいという意見が、数ヶ国の監督から出ました。5月15日は、一部の国では国内リーグが終わった翌日で、その時点で23人を選ぶのは無理だという意見です。しかし結果的にはFIFAは締切を変えませんでした。

日本は、監督とともに通訳をテクニカルエリアに入れるようにと要望しました。今回の2006年大会で、選手と同じ言語でのコミュニケーションができない監督を擁するところは、日本、韓国、イラン、サウジアラビアと4ヶ国あります。しかし、日本以外の3ヶ国は、通訳が入れないことをあまり気にしていません。ベンチの中で監督がアシスタントコーチに話をして、アシスタントコーチが出て行って伝えればいい、というんです。最終的にFIFAは、日本の提案を受け入れませんでした。2002年大会の時は、テクニカルエリアに2人入れることになっていたのですが、監督が通訳を連れて入れたのですが、今回はだめということ。通訳が入ることになってしまうと、通訳じゃない人間まで入ってしまうのではという議論もあって、やはりそれを防ぐには、一切なしということにして、グリーゾーンを残さない形になったようです。

鈴木：通訳は入れるんじゃないかと、日本サッカー協会では希望的観測としていたのが、当てがはずれたということですね？

江川：そうですね。あともう1つ。マーケティングについて、2002年大会では、参加チームに対して、FIFAの大会に入ったら一切スポンサーのロゴを付けてはいけませんということだったんですが、今回はある程度認められることになりました。それぞれの国がキャンプ地などにメディアセンターを設け、その中で独自のマーケティング活動をするのは構わないということです。

本大会に関して、グループリーグが終わった時の順位決定方法が変わりました。改定前の競技要綱31条5項では、各グループの順位は、以下の順に決定されることになっていました。

- a) 総勝ち点数 (points)
  - b) 関係するチーム間の試合の勝ち点数
  - c) 関係するチーム間の試合での得失点差 (goal difference)
  - d) 関係するチーム間の試合での得点数 (goals)
  - e) すべてのグループ試合での得失点差
  - f) すべてのグループ試合での得点数
  - g) FIFAワールドカップ組織委員会によるくじ引き
- これが改定前です。改定後は、
- a) 総勝ち点数 (points)
  - b) グループ内のすべての試合の得失点差 (goal difference)
  - c) グループ内のすべての試合の得点数 (goals)
  - d) 勝ち点が等しいチーム間の試合で得た勝ち点数 (points)
  - e) 勝ち点が等しいチーム間の試合で得た得失点差 (goal difference)
  - f) 勝ち点が等しいチーム間の試合で得た得点数 (goals)
  - g) FIFAワールドカップ組織委員会によるくじ引き
- ということになりました。

中塚：変更前のものが、僕らの認識からすると、もともとあったものの変更ですよ。つまり、これまでは勝ち点がまずあって、勝ち点と同じ時は得失点差、その次が総得点だというオーソドックスなものだったけど、2006年大会の、少なくとも予選は、そうじゃなかったですよ。勝ち点と同じ時には、当該チーム同士の勝敗で決するという。だから予選では、まずはオマーンとの一騎打ちという形になり、最終予選でも北朝鮮、イラン、バーレーンのそれぞれとの一騎打ちが重要になったわけですよ。ところが、今のお話によると、元の形に戻すということですか？

田中：そういうことになりますよね。勝ち点が一緒だったら得失点差だと。で、当該チーム同士が引き分けで終わった場合には総得点になるんですよ？これってやっぱり元に戻ってるんですよ？

中塚：そのことってどのメディアも取り上げてないですよ？

江川：JFAとしてのメディアリリースはしてないですね（後記：現在FIFAウェブサイト内のレギュレーションには修正版が掲載されている）。

牛木：メディアに発表ってことになればFIFAが発表しているんだろうと思うんですけど、それが日本の新聞には載らないということはもちろんあるわけです。日本サッカー協会が発表すべきものではないけど、日本サッカー協会はブリーフィングでは説明すると思うんですよ。でも、現時点では、必ずしも日本のメディアが必要としない情報だから、その時点になったらやるし、それから、ワールドカップに行けば、メディアセンターにはコンペティションのレギュレーションが積んでありますから、それを見れば分かることなただけけれども…。

## ■（当時の中学生が）メディアを通して感じたWM'74

中塚：だいぶ時間も経過しましたが、「（当時の中学生が）メディアを通して感じたWM'74 (Welt Meisterschaft)」を取り上げましょう。私は中1で、本格的にサッカー部に入ってバリバリにやりだしたころの夏ですね。7月の決勝戦のころは、ワールドカップがあるのを実際は知らなくて、自

分がボールを蹴ることで精一杯でした。夏休みに本屋へ行くと、「イレブン」や「サッカーマガジン」のワールドカップ特集号が積んであるんです。それがワールドカップを知った最初です。ちょうどその頃、親戚のおじさんがドイツに行くことがあって、現地でサッカー雑誌を買ってきてくれて、「なんかすごい大会があったらしいぞ」って言っていて。はじめて横文字の雑誌を手にしたときだったんですが、このように、まずは活字から入ったんですね。イレブン、サッカーマガジン、そしてサッカー本。本屋にサッカーの本ってそんなになかったので、牛木さんの『サッカー世界のプレー』はすごくありがたかったですね。

そして『おお、サッカー天国』という、中条一雄さんの本を見つけたんです。サッカー雑誌のほとんどはピッチの中のゲームの話ですけど、中条さんの本には、ゲームを取り巻く話がいっぱい載っている。その中に、4年間一生懸命働いて貯金し、4年ごとにワールドカップでそのお金を使ってしまう人の話が出てたんです。そんな人が世界中にほんまにおるのかなあ、うそやろって半分思いつきながら読みました。だけど今、自分が半ばそうなるうとしてる状況です（笑）。

ダイヤモンドサッカー（大阪では「ワールドサッカー」）の放送を毎週見るようになったのは言うまでもありませんが、まずは活字で感じた74年のワールドカップでした。いまとはずいぶん違いますね。

以上